
アタシの在り処【竜胆探偵事務所事件簿】

兄琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アタシの在り処 【竜胆探偵事務所事件簿】

【Nコード】

N0303M

【作者名】

兄疏

【あらすじ】

商店街の路地裏に一歩足を踏み入れてみよう。そこには貴方の見た事のないモノが、一杯あるはずだ。運が良ければ貴方はある探偵事務所を見つけるだろう。もし、見つけられたら勇気を出して扉を叩いてみよう。そこで貴方のホントウとウソを知る事が出来るかもしれない。【私立探偵、竜胆の生活や事件を描く作品です。読みやすい推理小説を目指して奮闘中。今回の事件テーマは『嘘』。円条寺家の面々と竜胆の身に何が起こるのでしょうか?】※タイトルが壮大過ぎたので変更しました（6月26日）。

路地裏の探偵事務所（前書き）

初めまして、そうではない方はこんばんわ、お久しぶりです兄琉です。

今回の小説は（エセ）推理小説。

推理小説を書くのは初めてですがどうかこうにか頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

注意

私の作品【三題小噺集／なんでもアリな物語達／】の【第一回『酒』『携帯』『火』】（2,500字程度）を事前に読んだ方が楽しめると思います。

一応読まなくても理解できる内容にはなっていますが、やはりキヤラを知っていた方が読みやすいと思いますので……。

※6月30日に細かい文章修正を行いました。話の筋は変わっていないので読みなおさなくても話は繋がります。

路地裏の探偵事務所

「ねえ、あの都市伝説知ってる？ 携帯電話の……」

日々の喧騒の中、行き交う噂話に耳を傾けてみよう。

「知ってる知ってる、願いが叶うんだよね」

「えっ、私は本当の事を教えてくれる場所だって聞いたけど、流石に嘘でしょ？」

その中の一つに都市伝説として語られる、ある場所がある。

「それがね、実際に行ったって人も沢山いるみたいなんだ……」

富裕層の住まう住宅街の噂話にも耳を傾けてみよう。

「私の大事な腕時計が無くなってしまったのよ、どうしましょ」

「だったら、あそこに行ってみればいいザマス。きっと、見つけてくれますわ！」

憶測と真実が飛び交い、元の形を覆い隠す。

「どうすればいいの？ 教えてくれませんか？」

だが時に真実に辿り着く、一握りの者達もいる。

「この携帯電話にかけるザマス、名前は……」

気が付けば誰も気がつかない様な街の片隅にあった。

街に溶け込んで、背景の一部として薄ぼんやりと認識されていた。

そして私は今……その前に立っている。

「竜胆^{りんどう}さん、今日は出かけないんですか？」

商店街から一本、いや二本ほど道を外れた路地裏にあるビルの一室から、その声は聞こえてきた。

「ん？ 今日何か予定あったか？」

「今日は娘さんの命日……ですよね」

中にいるのは一組の男女か、私はひとまず人がいるという事が分かり、胸を撫でおろした。

だが何やら重苦しい会話をしているようで、中々に入りづらい。

「……ああ、そうだったか？ まあいいじゃないか。それよりも紅^あ井^{かい}、これはなんだ」

竜胆と呼ばれた男は少しの逡巡の後、軽い口調だが若干の戸惑い

を含んだ声を上げる。

「先日は失敗しましたから、頼んでおきました」

後はこの扉を軽く二、三回叩き、要件を告げるだけ。たったそれだけの事に多くの勇気がいるのだけれど。

「おおっ、気が利くじゃないか！ では早速」

「何をやっているんですか、竜胆さんは駄目ですよ」

紅井と呼ばれた女性の少し鋭くなった声に怖気付いて、扉を叩こうとした手が一瞬止まる。

「なんでだよ」

「私の財布から出た金ですから、先日頂いた技術料で」

「なっ！ あれも元はと言えば俺らの金だろう。少しくら」 「駄目です」

気が付けば少し笑っていた。二人の関係が頭に浮かぶ。さっきまで怖気づいていた私が馬鹿みたいだ。

少しの勇気を出して、私は扉を叩き、古くなったドアノブを回して部屋へと入っていった。

「初めまして、ここが『私立竜胆探偵事務所』ですか？」

ここが、私を救ってくれる場所だと信じて……。

「紅井……」

「駄目です」

竜胆の言葉は非常にあっさりと却下される。

机の上にあるのは眩いばかりに輝く宝石の数々、それらが銀色の光沢を放つ台座に鎮座している。

まさに美の結晶。美術館から盗みだしてきたかのようなそれらは、竜胆の心を魅了してやまなかった。

「も、もう我慢できねえ！ 早い者勝ちだああああ」

「なっ！ 如何に竜胆さんいえども許しませんよ！」

書類をまとめていた為、初動の遅れた紅井は竜胆に先制を許してしまう。一步遅れて辿り着いた机の上からは、宝が一つ消失していた。

紅井の背中から地の底より這い出してきたかのような様などす黒い気が立ち上り、竜胆を睨みつける。

「竜胆さんに取られる位ならっ」

「な……紅井ッ」

紅井は必死の形相で宝石達を自分の元へとかき集め、自分のモノにしていく。竜胆も一瞬後に紅井を追いかける。二人の争いは熾烈を極めていった。

「あ……竜胆さん、それキュウリ入っていましたよ」

「なっ！ うぷっ……」

「嘘ですけど」

「ぐむっ……騙したなっ！」

「騙される方が悪いのです」

「あ、でも紅井の持っているやつも……」

「えっ！ 何かついて……何もないじゃないですか！ 嘘つきましたね」

「いや、紅井の持っているやつも、美味しそうだって」

「……っ！」

「あ、あのっ！」

「「……んぐ？」」

扉の前には、三度目の勇気を出して声をかけた少女。

机の前には、特上寿司を限界まで頼張った探偵と、その助手の姿があった。

少女が来てから十五分後。特上寿司を食べ終わった竜胆達は、少々気まずい空気の中向かい合っていた。

「あー、その……なんだ。見苦しいところを見せてしまったな」

「いえ、こちらこそ突然お邪魔してしまって……申し訳ありませんでした」

先程まで戦場となっていた机は紅井の手によって綺麗に片づけられ、お茶が二つ置かれている。

向かい合うのは竜胆と少女、紅井はデスクで何やら調べ物をしていた。

「早速だが、わざわざここに来たという事は仕事の依頼と受け取っ

ていいのかな？」

「はい、大きな事件という訳ではありませんが、お願いを」

「来るものは拒まないさ。ああ、そういえば自己紹介がまだだったな……俺は竜胆、一応この事務所の探偵だ。後ろにいるのは紅井、俺の助手だ」

「よろしくお願いします」

紅井はチラリと少女を見るとそのまま書類に目を落とした。いつもあんな感じなんだ、と竜胆は苦笑しながら一度だけ視線を机の向こうに向ける。

少女は、次は自分の番だと気付き姿勢を正した。

「あたしは^{さつき}皐月、円条寺^{えんじょうじ}皐月……遊神学園の中等部に通っています」

「円条寺……円条寺って言ったらあの警備会社の？」

「一応、そうですね……今回の依頼とはあまり関係ありませんが」

皐月は竜胆から少し顔を背け、机の下へと視線を落とした。

竜胆は少し顔をしかめ、自分の失敗を反省する。

「それで、依頼とは？」

当初の目的へと会話を戻すと皐月も顔を上げ、ゆっくりではあるが話し始めた。

「嘘つきを、見つけ出して欲しいんです」

それが、少女の依頼だった。

路地裏の探偵事務所（後書き）

今回は依頼人、皐月が事務所を訪ね、依頼をするところまででした。

次回からは竜胆が実際に調査に乗り出し、円条寺家の面々と交流していく事になります。

次回更新予定は……6月18日から19日の1時頃を予定しています。

話自体はほぼできている為、それ以上遅れると言う事はほぼないかと。

それでは次話でまたお会いしましょう。

円条寺家のセカイ（前書き）

円条寺家の生活、家族に竜胆達は何を見るのでしょうか……？
それでは第二回どうぞ。

※6月30日に細かい文章修正を行いました。話の筋は変わっていないので読みなおさなくても話は繋がります。

円条寺家のセカイ

「嘘つきを、見つけ出して欲しいんです」

それが、少女の依頼だった。

奇妙と言えば奇妙な依頼。しかし皐月の瞳は真剣な光を湛えている。

竜胆は改めて皐月の依頼に耳を傾けた。

皐月の話が終わり、お茶で一息ついた竜胆はゆったりと背中をソファーへと預け、天井へと視線を上げた。

ここで煙草でもふかしていれば探偵っぽいのだろうかなどと、どうでもいい事を考えながら情報を一つにまとめていく。

「つまりだ、円条寺さんは自分の身の回りの人たちの中に嘘つきが一人紛れている、それが誰かを見つけて欲しい……そういう事かい？」

「はい、事情を今話す事はできませんが……いずれお話できると思います」

皐月の話すところによると、身の回りの人間というのは皐月自身を含め六人。

まずは皐月自身。そして皐月の妹、両親、祖父、最後に円条寺家

に仕える執事。

この六人の中に嘘つきが紛れている。

「しかし嘘つきを探すと言っても、隠れて観察するだけでは流石に難しいんだが」

「その事ですが、竜胆さんには私の家へと住み込んでもらうつもりです」

「……はっ？」

皐月の当然、とても言いたげな表情に思わず竜胆はお茶菓子を取りこぼす。以前、依頼人から礼にもらった和菓子が小さな音を立てて机の上に落ちた。

「先日、円条寺家に何者かが侵入する事件がありました。幸いにして何かが盗まれる事はなかったのですが……」

「警備会社を営む家が外部の人間の侵入を許した事自体が問題だと」

無言で、皐月は静かに首を縦に振った。

「その調査、という名目で竜胆さんには来ていただこうかと思いましたが」

少しの逡巡の後、竜胆は紅井と顔を見合わせてお茶を一口。

「竜胆探偵事務所、喜んで力をお貸ししましょう」

手を繋ぐ二人の顔には、笑みが浮かんでいた。

その笑みが違う意味を持つ事に気がついたのは……紅井だけだったが。

「ふかふかの布団、広い部屋……そして、旨い料理っ！ 何もかも
があの事務所とは違うな」

「では戻ったら竜胆さんが食事を作ってくださいね」

「紅井、いたのか……」

竜胆達が円条寺家に住み始めて三日が経ち、二人は上流階級の生活
を満喫していた。

円条寺家があるのは、彼らの住む町の西部に広がる富裕層が多い
住宅街。ジメジメとした裏路地とは違い、爽やかな空気が二人を包
み込んでいた。

「で、竜胆さん……念の為聞いておきますが、調査の方は進んでい
るのでしょうか？」

「嘘つきの方か？」

「ええ、私の眼には何もしていないようにしか見えませんが」

紅井の攻めるような視線に竜胆は髪を一掻きすると布団から起き
上がる。

「ま、八割方だが……嘘つきは依頼人本人、つまり円条寺臯月だろ
うな」

「えっ……！」

「紅井、嘘をついた事がバレた時にはじめて、そいつは嘘つきにな
るんだよ」

やれやれ、という様に手を左右に広げ首を振る。

「依頼主は嘘つきがいる、と断言した。つまり、少なくとも依頼人には分かっているんだよ、嘘つきが誰なのか」

「だからと言って……」

「だから八割って言っただろうが。それにまあ、嘘つきが誰か分かっているのなら自分でどうにかするか、最初から俺に言ってくるだろうさ。それが無いって事は……そういう事だ」

いそいそと布団にもぐりこむ竜胆を無言で見つめ続ける紅井だが、当の紅井もしっかりとバスローブに身を包み、パックをしている。しっかりと、生活を堪能している二人だった。

「何かに、気が付いて欲しい……って事なんだろうな」

竜胆の呟きが、紅井に届く事はなかった。

「おはようございます、竜胆様」

円条寺家に仕える執事の挨拶で起きるのも三回目、二人は大した抵抗もなく起き上った。

今日が土曜日であろうと普段と同じ時間に起こされる。二人は普段よりも遥かに健康的な生活を送っていた。

「食事を一緒に取りませんか、と訓行様から伝言を預かっておりますが、如何でしょうか」

「ああ、俺もすぐに行くから伝えておいてくれ」

「了解しました」

執事は恭しく一礼した後、部屋を後にする。紅井はいつの間にか

着替える為にバスルームへと行ったようだ。

竜胆自身着替える為に、若干の名残惜しさを残しつつベッドから離れた。

「さて、今日も一日……頑張りますかね」

その日の朝食の席。竜胆は円条寺家の面々と食事を取っていた。

「竜胆探偵、調査の具合はどうですかね？」

他愛ない談笑も少ない中、口を開いたのは父親の訓行だ。のりゆき四十代後半にも関わらず、警備会社に務めているからかその肉体は程良く引き締まっている。

「ええ、大分見えてきましたよ。まだ憶測ばかりなのでお伝えする事はできませんがね。……訓行さんこそどこか嬉しそうですが、何かあったのですか？」

コーヒーをすすりながら竜胆は不敵な笑みを浮かべる。よく見ると首筋に冷や汗をかいている事が分かるのだが、それに気が付く者は幸いにもいなかった。

「お、分かってしまうかね？ いやあ昆虫の標本が趣味でね、今日は珍しい標本を知人から譲ってもらえるのだよ。それが楽しみなんだ」

訓行は口にしたカップを机に置くと、嬉しそうに語る。

「でも、まさか本当に来て下さるとは思いませんでしたわ。わたくし、在間さんが竜胆さんにお世話になったという話を聞くまでは都市伝説だと思っていましたから」

訓行の後を継ぐように別の角度から声がかかる。訓行の妻、和美^{かずみ}だ。貴婦人、とまではいかないものの、一目で上流階級と分かる佇まいをしている。

「はははっ、都市伝説ですか。私共ももっと頑張らねばなりませんね。ところでお二人は事件当時、どちらに居らっしゃいましたか？参考程度に聞いておきたいのですが」

乾いた笑いを浮かべながら、竜胆は隣の紅井を肘でつついた。その行為の意味するところに気がついた紅井は少しだけ体を竜胆へと傾ける。

「在間さんは、以前猫を探してあげたザマス婦人の事です」

周りの人間には聞こえないように紅井のフォローが入る。いつもの事なので、紅井も慣れたものだった。

「私達はあの時、二人で食事に出かけていましたわ。ねえ訓行さん」
「ああ、そうだったな。家に帰ってきてからびっくりしたものだ」

それから暫くは他愛ない会話が続いていたが、和美はふと思いついたように娘の方を向いた。

「ほら、日和ちゃんも竜胆さんに聞く事はないの？ 探偵さんと話す事なんて滅多にないわよ」

「え、ええっと……」

和美はそれまでずっと聞き手に回っていた娘の日和ひよりに話を振った。普段から病弱で人と接する機会の少ない日和は未だに竜胆達に慣れていないようだ。以前竜胆と日和が二人つきりになった時は、あまりの重々しい空気に紅井が入るのを五分ほど躊躇った事もある。決して自分から話しかける事はなかったし、話したとしても返ってくる情報は曖昧で当たり障りのないものばかりだった。

竜胆が皐月に聞いたところ「金持ちの娘なんて、家の重圧で高飛車になるか極度の人見知りになるのよ」と返ってきた。じゃあ皐月は高飛車な方か、と竜胆が返すと拳が返ってきたのはまた別のお話。

それでも最初に比べれば大分慣れてきたようで、人に促されれば喋るようになっていた。

「竜胆さんは、皐月ちゃんの事を……どう思いますか？」

だが口を開いたと思えば突拍子もない事を突然口にするから困ったものである。日和の言葉に一番驚いたのは竜胆ではなく皐月だった。

「なっ！ いきなり何言ってるのよ！」

「ご、ごめんなさいっ！」

今の今まで日和同様、全く言葉を発していなかった皐月は思わず立ち上がった。

立ち上がってから自分のした事に気が付き、うつむきながら静かに席に着く。

「皐月ちゃんは……そうだね、元気でとても優しい子だと思うよ。でも、そんな事は家族の日和ちゃんの方が分かっているんじゃないかな？」

竜胆は当たり障りのない台詞で日和の言葉をかわすが、日和はそれで満足したようだった。

「ええ、皐月ちゃんは……大事な、家族の一員ですから。ね、お父様」

「……ん？　なんだ日和、聞いていなかったよ」

「訓行様、そろそろ……」

訓行は日和の言葉を聞いていなかったのか、読んでいた新聞から顔を上げ、時計を見てから立ち上がる。その返事はどこか台本を読んでいるかのようであった。

竜胆は、静かにその様子を観察していた。

「訓行さん、お仕事頑張ってくださいね」

「ああ、母さん、日和、行ってくるよ」

訓行と執事は部屋から出て行き、食卓を囲むのは竜胆と女性四人だけになる。

「さて、私共もそろそろ調査にかかろうと思いますので失礼します」

「あ、あたしも付いていく。日和はどうする？　来たら？」

「え、えっと……い、行ってもよろしいでしょうか」

「遊びじゃないんだが……まあいいんじゃないか？」

竜胆は困った様に頭を一掻きするが、二人の同行を許可した。

「日和ちゃん、体には気をつけるのよ」

「はい、お母様」

和美に三人は送り出され、食卓を後にする。

円条寺家に来て四日目の朝はこうして始まった。

円条寺家のセカイ（後書き）

『円条寺家のセカイ』でした。

更新遅れてすみません……。これが恐らくほぼ遅れないの『ほぼ』の部分です……。泣

次回からようやく推理らしい、と言うか事件に関わっていきます。次こそは予定通りにつ。と言う訳で、次回更新は6月21日か22日の0時～1時となります。

それではまた次話でお会いしましょう。

侵入経路 円条寺辰巳（前書き）

竜胆達は現場検証へと足を向けます。そこで得た情報はどのような意味を持つのでしょうか。

では第3回です。

※6月30日に細かい文章修正を行いました。話の筋は変わっていないので読みなおさなくても話は繋がります。

侵入経路 円条寺辰巳

竜胆達が円条寺家に来てから4日目の朝……。

「今日は何をするつもり？」

「んー、そうだなあ……。今日は以前皐月の言っていた屋敷侵入の事で、現場を見ようかなと」

「普通なら最初にする事だと思いますが……」

紅井の冷たい口調に再び冷や汗を流す竜胆だったが、聞かなかった事にして先に進んでいく。

円条寺家の庭は広い。家の周りは軽い林に覆われており、事件当時のままの様相を示していた。

「さて、まずは林を見て回るか」

四人は犯人が逃げ込んだと言う林へと、足を踏み入れて行ったのだった。

林に入っすぐ、竜胆は紅井からカメラを受け取り、現場写真を撮り出した。

「やはりカメラの一台くらい欲しいな……。機材を依頼主から借りるってのは何か違う気がするぞ」

「では竜胆さんの自腹で払いますか？」

「やめとく……」

竜胆は小さな溜息を何度も吐きながら林を写真に収めていく。

「な、なんでそんなに撮っているんですか？」

日和の勇気を振り絞った小さな声に、竜胆は一旦カメラを下ろした。

「今から俺達がここに入るんだ。もしこの状況が証拠になるのなら、俺たちは今から証拠を壊しながら進むことになる。そこでカメラに収めておくって寸法さ」

口を開けたまま頷く日和を尻目に竜胆は先へと進んでいく。

暫く進んだところで、今度は皐月が何かに気付いた様に「あれ？」と呟いた。

「なんだ？」

「えっと、大したことじゃないんだけど……枝が色んな方向に折れているのはなんでだろう、って」

確かに、皐月の言うとおり枝は一方向のみではなく多方向へと折れ曲がっていた。竜胆は一旦止まり、顎に手を当てる。

「ふむ……侵入者が同じ道を行き帰りで使ったんだろう。なんでここまで一緒なのかは理解できないが、そう考えるのが妥当だろう」

「つまり、侵入者はこの先にある壁から入って出て行ったのね」

「ま、まあ……そうだな」

答えを探りだして感動しているのか、皐月は口調が少し強くなっ

ていた。

その後も竜胆は折れている枝や壁を調べてから元の場所へと戻っていった。

木陰に入ると竜胆は林に背を向け、三人へと口を開く。

「ひとまず、事件当時の状況を確認しておこうか。不審者の襲撃があったのは五日前の深夜零時過ぎ。不審者はこの林から侵入し、二人の祖父である円条寺辰巳の部屋付近の窓を割って侵入したものの何も奪わずに逃走。警備会社のメンツに関わるのか警察には連絡せず、これでいいな」

「はい、第一発見者は円条寺皐月。更に玄関からの正面突破はセキユリティ上不可能だと考えられます」

竜胆の言葉に紅井が付け足し、皐月達が頷いた。

「因みにその時皐月は何をしていたんだ？」

「私はお爺様と一緒にお爺様の部屋にいたわ。毎晩のお菓を届けるのは私の役目だから。一番近い部屋に居たから着くのも早かったの」

「そうか……因みに日和ちゃんは皐月と一緒にの部屋にいたかい？それとも自室で休んでいた？」

「私は、皐月ちゃんと一緒にの部屋には……いませんでした。あの夜は、あまり……その、体調が優れなかったのを覚えています」

二人の証言を竜胆は頭の中にしっかりとしまおうと一度右手の親指と中指を打ち鳴らした。

「さてここで問題だ。なぜ、泥棒サンは何もせずに帰ったのでしょうか……二人はなんでだと思う？」

「時間が足りなかったんじゃない？」

「え、えっと、盗む事が目的では……なかった、なんて事ないですよね……」

言ってから後悔したのか日和は自分のスカートを弄りながら俯く。皐月は竜胆を睨みつけるが、当の竜胆は驚きを隠せないようだった。

「いや驚いたな……俺もその考えなんだ。一応時間が足りなくて逃げ出した、という考えもなくはないんだが。恐らくそれはないだろう」

「なんでよ……」

今度は皐月の方が膨れっ面を竜胆へと向ける。自分の意見が一蹴された事が気に入らないようだ。

竜胆は軽いため息をつくと皐月へと一本指を立てて突き出した。

「まず一つ、円条寺と言えば警備会社として有名だ、そんな家を狙うやつがいるか？ 俺なら狙わないな」

皐月が指に怯んだ隙に口早に語りかけ、二本目の指を立ててブイサインを作る。

「仮に狙うとしたら余程金に困っていてどこでもいいからと侵入した奴か、実力を試したい奴のどちらかだろう。前者ならとくに捕まっているか何かを手にするまでは逃げないだろう。だが後者に関しては技術が稚拙すぎる」

ブイサインを引っ込めると、紅井から受け取ったファイルから写真一枚抜き出した。

そこには割られた窓ガラスとその周囲の写真がある。

「まず、割られたガラスについてだが……これは防犯ガラスと言う特別なガラスでな、強化ガラスとは物が違う」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべる二人に苦笑を浮かべる竜胆。説明する為に四人は現場へと向かった。

「これが、防犯ガラスだ」

ガラスを軽く叩きながら竜胆は紅井に視線を送る。

「防犯ガラスとは強度が高く、貫通しにくい加工をされたガラスの事です。大体十発以上ハンマーで強打しなければ割る事が出来ません」

紅井はそらで言い切ると、資料をめくり一枚の紙を取り出す。

「記録を見ますと最近この辺りのガラスのみ、強化ガラスから防犯ガラスに変えたとの記録がありました。モニターを兼ねてなのか枚数自体は少ないですね」

資料を閉じ、これでいいですかと言わんばかりに竜胆に視線を返した。

「加えて言うと防犯ガラスは他のガラスと見分けがつくようにマークが付いている事が多い。今回のガラスもそうだな」

竜胆は一度右手の指を打ち鳴らし、目の前の二人に語りかけた。

「つまりだ、プロの泥棒サンならまず侵入し易い強化ガラスを狙うんだよ。わざわざ防犯ガラスを狙う奴なんて、いない」

「ほう、探偵を呼んだと聞いたが……なかなかどうして、頭は回るようじゃの」

「お、お爺様！ お体は大丈夫なのですか？」

突然窓が音を立てて開いたと思うと、四人の頭上からしわがれた声が響く。顔を出した老人は顎髭を触りながら竜胆達を見下ろしていた。

日和の慌てたような声に微笑みながら、老人は頷きを返す。

「おお、儂の可愛い孫娘ではないか。ほっほ、部屋の前に出てくる位は訳ないわい」

「貴方が、円条寺家の長……円条寺辰巳^{たつみ}さんですか」

「ほっ、そうかしこまる必要はないぞ、竜胆秋生殿。先程の様に推理を続けてくだされ」

竜胆のこめかみがピクリと動いた。

「竜胆さん……落ちついてください」

紅井の言葉で竜胆は自分が目の前の老人を必要以上に警戒している事に気がついた。無意識に口へと持っていきかけていた右手をゆっくりと降ろす。

「ああ……すまない。では続きだが、先程言った事から盗人の線は限りなく薄い。そこで可能性として浮上してくるのが……」

「愉快犯、もしくは恨みをもった人間の犯行ってところ？」

竜胆に被せる様に皐月が口を開いた。竜胆は一瞬眉をひそめるが、

気を取り直して口を開く。

「まあそんなところだ。何か恨みを持たれるような事がありますかね？」

開いた窓へと言葉を投げかけ、反応を待つ。老人は髭を一撫で、思案するような表情を見せるとゆっくりと口を開いた。

「……儂も一企業の長じゃ。恨まれる可能性等、あり過ぎて困るのお。最近では儂を退かせようとする動きも多いようじゃ」

何が多い『よう』じゃ、だと呟きながら竜胆は頭を回転させる。

「と、なるとやはり何かしら恨みを持った人間が忍びこんで、何かしようとしたが時間が足りずに逃げ出した」

「もしくは分からないだけで目的を達成しているか、ね」

再び被せてきた皐月は誇らしげに、竜胆はまたお前かといった表情で口を歪める。だが竜胆自身の考えと同じだったのか、文句は言わずに話を続けた。

「その線で考えていこうと思っている。今日はこの辺で終わりかな」

右手の指を打ち鳴らして解散を告げた。それぞれがそれぞれの場所へと帰ろうと向きを変えていく。皐月と日和が去った後に竜胆は辰巳を呼びとめた。

「なんじゃ？」

「一つお聞きたい事があるのですが……事件のあった晩、貴方は一人で部屋にいましたか？」

「……いや、部屋には居ったが、一人ではなかったのお。孫娘と二人でいたわい」

「となると皐月が部屋にいた事は正しいのか……」

「ん？ 何か言ったかの？」

「いえ、何でもあります。それでは失礼します」

竜胆と紅井は庭を後に、客室へと戻っていった。

侵入経路、円条寺辰巳（後書き）

『侵入経路、円条寺辰巳』でした。

今回は状況説明が多い回だったので面白みは薄かったかもしれませんが。

次回、遂に事件は動きだします。

竜胆達に降りかかる事件、円条寺家はどう変わっていくのでしょうか。

更新は23日0時から24日0時を予定しています。

カゾクと最後の晩餐（前書き）

第4回、カゾクと最後の晩餐です。
どうぞ！

※6月30日に細かい文章修正を行いました。話の筋は変わっていないので読みなおさなくても話は繋がります。

カゾクと最後の晩餐

執事が二人を呼びに来たのは日が完全に落ちるかどうかという時間、夕食の誘いだった。

部屋でそれぞれの事をしていた竜胆と紅井は、並ぶ食事に期待しながら客室を後にした。

「おお、これはこれは……今日も豪華ですね」

二人の前に並び広がるのは色鮮やかな中華の数々。

思わず竜胆は口笛を一吹き、隣にいた紅井も開いた口が塞がらないようだった。その様子に招いた円条寺家の面々も満足したように微笑んでいた。

「ほっほ、二人とも座りなさい。旨い料理は温かいうちに食べねばな！」

辰巳は二人を招き入れる様に大きく手を広げて着席を促す。二人は嬉々としてその言葉に従い椅子に座った。

「竜胆探偵、今日は日和を連れて林の方へと行ったと聞いていますが、何か収穫はありましたかな？」

「いやはやこのエビチリがなんとも……え？ あ、今日ですかっ！ そうですね、今日の調査で盗人ではなく愉快犯である可能性が出てきましたね」

ほう、と訓行は商品を見定めるかのように竜胆を眺める。紅井と皐月は竜胆の言葉に疑いの眼差しを向けるが、視線だけで言葉を発する事はなかった。

「因みに、後何日程度で解明できそうですかのお？」

一番の上座に居た辰巳が顎髭を指で梳きながら問いかける。目を細め、口角を吊り上げた表情からは竜胆に対する期待と懷疑の念が込められていた。

竜胆は老人を一瞥すると、鉄鍋で焼かれた餃子を一口に放り込み、飲み込む。

「後……三日以内には、必ず」

老人をしつかりと見据え、言い放った。

「竜胆さん、あんなこと言ってしまってよかったのですか？」

風呂上りの紅井はドライヤーを髪に当てながら竜胆に語りかけていた。

あんな事、とは当然『三日以内に』と言い放った食卓での一言。

「なあ、紅井……この家族を見て、どう思う？」

「それよりも私の質問に……」

「いいから……どう思う？」

竜胆の答えになっていない返答に紅井は声を少し荒げるが、いつ

になく真剣な表情の竜胆に押されてしまった。

「この家族、ですか……そうですね、強いて言うならこの家族には
皐月嬢が存在していませんね」

「よく分かっているじゃないか。そう、この家族、厳密には日和ち
ゃんを除いてだが、皐月がないモノとして回っている。邪魔者扱
いじゃない、折角あるのに……無くしているんだ」

竜胆は一言一言をしつかりと、区切る様にして言葉を放つ。

言い終わった竜胆は親指の爪をガリッと強めに噛んだ。竜胆のイ
ラついた時特有の行動に、紅井はある事を思い出して息を飲んだ。

「竜胆さん、落ちついてください」

竜胆の手を両手で包みこみ、優しく語りかける。紅井の言葉に気
を取り戻した竜胆は、頭を下げて謝っていた。

「ああ、事件に関してだったな。そっちの方は既に九割方解決して
いるさ」

「……昨晚も同じ事をした気がします、驚いた方がいいですか？」

呆れ返る紅井を放置して竜胆はカメラを取り出した。紅井と竜胆
は二人してカメラを覗き込む。

「庭から撮った林の写真ですか……これがどうかしたんですか？」

「落ちている枝や、折れている枝に注目して欲しい。殆どが手前に
向かって落ちているだろう？」

竜胆の指し示す枝はその殆どが写真の手前、つまり屋敷側に落ち
ていた。竜胆が林で落ちている枝を調べていたのはこれを見る為だ

ったのだと説明する。

「通常、外部からの犯行なら行きは見つからないように慎重に、帰りは急いで帰るはずだ」

「成程……だったら枝が折れる向きは壁側、つまり外に向かっていなければおかしいと言う訳ですね」

紅井は得心したように何度も頷いていた。

「そうだ、そこから内部の人間の犯行である線が濃厚になって来る。ガラスの件に関してもあの場で言ったが……防犯ガラスを狙うメリツトが少なすぎる」

竜胆はカメラをベッドへと放り投げて、自分も一緒にダイブした。

「ああ、そういえば……林を探索していた時も皐月はやたらと外部の人間の犯行だと強調していたな。それに、事件当時日和ちゃんは自室に、皐月は事件近くの部屋に居た……」

「では、やはり犯人は……」

「でもやっぱり、一つ……」

竜胆が言いかけた、その時。

ガッシャアアアアアン！！

庭の方から何かが砕け散る音が響いた！

「何だっ！」

竜胆と紅井はベッドから跳ね起き、勢いよく扉を開け放つ。
若干のまどろみの中に居た二人の意識は一瞬にして覚醒し、二人は裸足のまま誰もいない廊下を疾走していた。
月明かりが差し込む長い廊下を二つの影が駆け抜ける。

「くそっ……！ どうしたってんだ！」

「また……襲撃でしようかつ、はっ」

次の角を曲がれば通れば庭への廊下にたどり着く、と言ったところで別の角から現れた人影に竜胆は激突した。

二人は別方向へと飛ばされ、紅井は咄嗟に人影の方を抱え込んだ。
激しい音を立てて廊下を滑る三人。

「ぐっ……！」

「きゃあ！」

「大丈夫ですか？」

紅井が咄嗟に抱え込んでいたのは皐月。彼女も急いで来たのか寝間着姿だった。

「くそっ、紅井……そっちは任せた！」

「分かりました、竜胆さんは先に！」

激しく打った膝頭を擦りながら、竜胆は現場へと駆けつける事を優先した。背中にまるで粘土の様なドロっとした汗が流れおちるのを感じ、ひたすらに手と足を振る。

曲がり角を曲がったところで竜胆が見たのは、開け放たれた辰巳

の部屋の扉と、その前で座り込んでいる日和の姿。

「日和ちゃんっ！」

半ば放心している日和が返事をする事は無く、ただただ震えていた。

…、部屋の前へと辿り着き、竜胆は日和の視線の先に目を移したが…

そこにあったのは

床に倒れ込み動かなくなった

円条寺辰巳の、まだ少し暖かさの残る、体だった。

カゾクと最後の晩餐（後書き）

辰巳老がお亡くなりになってしまいました……。

そして次回は少しばかり暗めの回になりそうです。

では次回もよろしくお願いします。

あ、次話更新は6月26日0時から27日0時を予定しています。

歪んだカゾク（前書き）

前回、円条寺辰巳の死体が部屋に転がっているのを発見した竜胆。
これからどうなっていくのか……。

※6月30日に細かい文章修正を行いました。話の筋は変わっていないので読みなおさなくても話は繋がります。

歪んだカゾク

「なっ……！」

竜胆は咄嗟に日和の両眼を手で覆うと、部屋の中が見えない場所へと半ば引きずる様に連れて行く。

「来るなっ！」

遅れてきた訓行和美夫妻が視界に入った竜胆は、激しく静止の声をかける。竜胆のあまりの剣幕に驚愕した二人は、その場で固まる様に立ち尽くした。

「警察に連絡を！ ……早くっ！」

叫ぶ様な竜胆の声に一瞬遅れて気を取り戻した二人は、何かに追われんばかりの勢いで走り出した。

「どうなって、いやがる……」

竜胆の沈痛な叫びだけが、屋敷に空しく響いた。

「被害者は、円条寺辰巳……円条寺警備の会長、死因は毒殺。青酸

カリ、か」

「ご苦労様、警部」

次の日、円条寺家は警察の姿で溢れていた。

円条寺辰巳の寝室は事件当時のまま、ティーカップ等が散乱した状態で保存されていた。竜胆は部屋の中に居た一人の警部を探し出し、話しかける。

「おお、竜胆か。お前も災難だったな」

顔見知りなのか、警部は竜胆を追い出すような事はせず迎え入れていた。

「まあ仕事だからな。因みに事件の詳細、家族には？」

「まだ言っていない、お前の指示なんだろう？」

「すまない……少し試したい事があってな」

警部は胸を張って高らかに大きな笑い声を上げると、竜胆の背中を打つ。

「お前と俺の仲だろう気にするなっ、ガハハハ！」

竜胆は硬い笑みを何とか浮かべながら、背中を擦っていた。

「竜胆、今から事情の説明に行くが、お前も来るか？」

当然、と頷き二人は円条寺家の待つ居間へと向かっていった。

緊迫した空気が場を支配しており、少しでも突けば破裂しそうな

風船の様だった。

「竜胆探偵、どうでしたかっ!？」

部屋に入ってきた竜胆を確認するや否や、訓行が食いつく様に竜胆へと迫って来る。

「円条寺辰巳さん、死因は……毒物によるものだそうです。ティーカップから検出されました」

「やっぱりっ! 貴様が犯人なんだろう!」

訓行は皐月へと飛びかかり、襟元を掴みあげた。苦しそうにする皐月だが、目立った抵抗はしない。

「止めろっ!」

竜胆が訓行へと掴みかかり、皐月から引きはがす。皐月は不規則な調子で口から空気を漏らしながら地面にへたり込んだ。

紅井が皐月の背中を擦り、落ちつかせる。

「何で皐月が犯人なんだっ、アンタ自分が何を言っているのか分かってるのか!？」

「ああ、分かっているさ。だがな、コイツが犯人なんだよ!」

「おい、止めないか」

お互いに殴りかからんばかりの剣幕を止めたのは警部。

しかし意外にも、警部が止めたのは……竜胆の方だった。

竜胆の顔にあって、という表情が浮かぶ。その沈痛な表情が警部に伝わったのか警部は軽く顔をしかめた。

「竜胆、我々の見解でも円条寺皐月が第一容疑者なんだよ」
「なっ……！」

警部の言葉に竜胆は耳を疑った。

「なんで、だよ……」

「毒物が検出されたのはティーカップからだ。そして毎晩それを届けていたのは円条寺皐月なんだよ」

「だが、事件の時に運んだのは皐月じゃないはずだ！」

警部は静かに、日和の方を向いた。

「円条寺日和さん、事件の晩に貴方がお茶を運ぶ際貴方が準備をしましたか？」

「いえ、私では……ないです。私が行く時には……既に準備された状態でした、から」

日和は相変わらず落ちつかない様子で、目を下に向けていた。

「と、言う事だ。それに何より円条寺日和さんには動機が、無い」
「……っ！」

「おお、そう言えば日和、父から私に何か言伝はないか？ 私宛の遺書等でもいいぞ」

「いいえ、ありません……でした」

日和の言葉に露骨に落ち込む訓行。それを見て竜胆の心は一気に沸騰した。

「だからってっ……娘が、自分の娘が殺しをしたって言うのかよ！ 家族だろう！」

「残念だが、コイツは我々の娘ではないんだよ」

竜胆の脳に、訓行の言葉が、重く沁み渡った。

「は……？」

思わず口から出たのは呆けた様な情けない声。

「コイツはな、ある日突然父が連れてきたんだよ。つまり父の養子だ。突然この家に連れてこられて今の状況になっているんだ。恨みこそすれ、喜ぶわけがないだろう？ 動機は十分ってわけだ」

「逆に聞きますが、竜胆さんは……アレが犯人ではないという証拠を提示してくださるのかしら？」

「……くっ」

何も言い返せない竜胆に勝利を確信したのか、夫妻は警部の方へと向き直った。

「竜胆、悪いがこの子は詳しく話を聞く為に預かせてもらおうぞ」

警部自身、皐月の様な子を捕まえるのには抵抗があるのか最後まで苦々しい表情を浮かべたままだった。

「竜胆さん、嘘つき……見つけて、くれなかったね」

皐月の最後の一言と、痛々しい笑みが竜胆の心に深く突き刺さっ

た。

歪んだカゾク（後書き）

【歪んだカゾク】でした。

今回は事件発生から次への繋ぎと言う事で短いです。

次回、若しくはその次からは解決編です。

更新は28日か29日の0時……と言いたいのですが、次回までに今までの部分を再編集します。

大幅な変更は予定していませんが、『漢数字と算用数字の統一』『地の文の表現、文末の変更』を主に変更します。

なのでもしかしたら一日ほど遅れるかもしれませんがご了承ください。

あ、後タイトル『歪んだ世界を繋ぐモノ』が無駄に壮大過ぎたと感じた為『アタシの在り処』へと変更しました。これも結構適当なのでもう一度ほど変わる可能性有です。

それではまた次回お会いしましょう。

手紙、姉妹の絆

カリカリカリ……

探偵事務所には竜胆の爪を噛む音だけが響いていた。

「竜胆、さん……」

紅井も何と声をかけていいのか分からず、時々名前を呼ぶだけだった。

事務所に帰ってきてくれこれ二時間ほど同じ事が繰り返されている。紅井が精神的に参ってきた、その時。

カタン

と、何かが事務所のポストに投函される音がした。

「なんで、しょうか？」

紅井は席を立ち、ポストに入ったものを取り出すが、竜胆は全く気が付かない様子で机を見続けていた。

「これは……」

紅井は思わず手に取った葉書を取り落としそうになる。

「……どうした、紅井」

紅井は黙って、竜胆に葉書を両手で大事に手渡す。

「……これか、飽きないな。俺には行く資格が無いと、言っているのに」

竜胆は葉書を流し読むとゆっくりと机の上に、裏返して置いた。

「竜胆さん、もう一度最初から考えなおしてみませんか？ 今回の事件のこと」

「だから言っただろう、嘘つきは円条寺皐月。そして犯人は同じく円条寺辰巳のま……」

事務所の時間が、止まった。

竜胆の中でここ数日がリフレインされ、出来事を脳内で追いかけていく。

「……捕えたっ！」

数分後、竜胆は勢いよく立ちあがった。

「成程っ……そう言うことか！ 紅井っ、もう一度円条寺家に行くぞ！」

「……はいっ！」

竜胆と紅井は再び立ち上がり、円条寺家へと足を向ける。

事務所に残された葉書には、丁寧な字でこう簡潔に書かれていた。

午後一時、娘の前でお待ちしています。

竜胆燈音

事務所を飛び出してから数十分後、二人は再び円条寺家の前に来ていた。

「さて紅井、それじゃあ嘘つきを……見つけに行くぞ」

「はい、竜胆さん」

竜胆は不敵な笑みを、紅井は一步後ろで冷笑を浮かべる。

「一体何の用ですか？ もう用は無いはずですが」

竜胆を迎えたのは和美だった。あからさまに嫌な顔をされたが、和美は渋々二人を招き入れた。

「日和ちゃんとお話したいのですが。訓行さんは……？」

「……まだ会社から帰ってきていませんわ」

二人は少し前に居たはずの場所を懐かしむように見回しながら廊下を進んでいった。

「あれ、竜胆さん……どうしたんですか？」

「日和ちゃんに、聞いておきたい事があってね。ゴメンね、突然」
「いえ、だ、大丈夫です……」

竜胆と訓行の言い合いを見たからだろうか、以前よりも若干距離が開いている様に竜胆は感じた。

苦笑すると用意された椅子に腰かけ、真剣な眼差しで日和と向き合う。

「今から、三つ質問をするよ？ それに答えて欲しい」

「はい……」

ではまず一つ目、と竜胆は日和に向けて指を一本突き出した。その顔には微笑みが浮かんでいる。

「不審者が侵入した時の話だけど、日和ちゃんは……自分の部屋に、居なかったね？」

「はい……、私は自分の部屋に、居ませんでした」

竜胆は先程よりも大きな笑みを浮かべて、二本目の指を突き出した。

「円条寺辰巳が亡くなった夜、日和ちゃんがティーセットを持っていったという話だけど……このお茶を準備したのは皐月かどうか、日和ちゃんは知らないね？」

「はい、いつもは皐月ちゃんが用意してくれるのですが、先日は私が行った時にはもう準備されていました」

最後だと言わんばかりに、竜胆は三本目の指を掲げる。

「これが一番、重要な事なんだけれど……日和ちゃんは皐月の事が好きかい？」

「……はいっ、大好きです！」

竜胆は、日和の本当の笑顔始めてみた気がした。日和の頭を一撫で、紅井の方へと向き直る。

「紅井、警部に電話してくれないか？」

紅井は大きく頷くと携帯電話を取り出して、操作を始めた。

「おい竜胆、事件が解決したってどういう事だ」

時計の長針が半周した頃、警部は皐月を引き連れて再び円条寺家を訪れていた。

「どういう事も何も、言葉のままだよ警部」

「おい、これはどういう事だ！　もう事件は解決しただろう！」

警部達が揃った頃、訓行が仕事を終えて戻ってきていた。

「いえ、違いますよ訓行さん。事件は、これから解決するんです」

竜胆は、この時の訓行の一瞬しかめられた表情を見逃さなかった。

「さて、この事件をもう一度、見直してみましょう」

一堂に会した人たちはそれぞれの思惑を胸に、竜胆へと耳を傾ける。

「今回の殺人事件、その前に何者かがこの屋敷に侵入するという事件がありました」

警察側の人間は聞いていなかったようで困惑の表情を浮かべる。反対に訓行達は渋い顔をしていた。

「その事件は、愉快犯だと結論が出たんじゃなかったのか……」
「……まずはこの写真を見てください」

竜胆は紅井から林の写真を受け取った。例の枝が折れているところを撮った写真だ。

「この写真は犯人の逃走経路を屋敷側から撮った写真です。見ていただけると分かるのですが、枝の殆どは手前側へと折れています。つまり、犯人は屋敷側に戻ってきているんですよ。この意味が分かりますか？」

竜胆は日和へと視線を向け、答えを促した。

「え、えっと……外の人が犯人、では……ない？」

「そう、そう考えるのが普通です……が、ここから先は推測なのですが、その考えは正しくもあり、間違いでもあるのです」

周囲の空気が戸惑いを帯びていくのを竜胆は感じていた。

ここからは推測だらけ、穴だらけの推理でしかない。竜胆の背中にシャツがべったりと張り付く。

「まず、第一発見者の皐月さん……あなたはあの時犯人を見ているはずですよ」

「……私はあの時お爺様の部屋に」

「それが、あなたの【嘘】です。あの時、部屋に居たのは日和ちゃんのはずだよ」

「日和は自分の部屋にいたはずよ……」

後の方の言葉は自信をなくしていったのか小さく呟くようになっていた。

自分の推測が正しい事を確信した竜胆は再び口を開く。

「そう、私も始めはそう思っていました。しかし、円条寺辰巳に話を聞いた時彼はこういったのです『孫娘と二人で居た』と。だが皐月さん、あなたは円条寺辰巳の『孫娘』ではないのです」

これが竜胆の知らなかった事実。辰巳の養子であるなら辰巳にとって皐月は孫ではなく娘という位置づけになる。

「日和ちゃん、君はあの夜、円条寺辰巳の部屋に……居たね？」

竜胆の確かめる様な口調に、日和は周囲の人間の視線に脅えながら小さく頷いた。

微笑みを返してから、再び竜胆は顔を上げる。

「更に言うならば日和ちゃんに聞いた時、彼女は皐月さんと一緒に部屋に居なかったと証言していますが、自室に居た、円条寺辰巳の部屋に居なかったという類の証言はしていない。円条寺辰巳の証言と併せて考えた結果、一つの事実が浮かび上がる」

円条寺辰巳にとって孫娘とは日和唯一人、つまり部屋に居たのは辰巳と日和の二人だけと言う事になる。

では皐月はどこに居たのか……？

「皐月さんは恐らく、円条寺辰巳と日和ちゃんの会話を聞いてしまった。恐らく何か重要な内容だったのでしょう。部屋に入る事が出来なかった。だが、そこで皐月さんは見てしまったのです」

皆の視線が皐月へと集まる。皐月は顔を背けるが、その表情に恐れや震えはなかった。

「外からの侵入者を……」

ざわり、と動揺が走ると同時に疑問の声が上がる。竜胆は手で制止を示し、ゆっくりと口を開いた。

「私が先程正しくもあり間違いでもあると言ったのは、外部犯と内部犯……この二つが存在していたからなのです」

未だ理解の声は上がらない。だが竜胆は気にせずに話を進める。

「犯人は侵入して辰巳さんを殺害しようとした。しかし、皐月さんに出くわしてしまった。これは犯人にとって致命的でした。そこで逃走を図ったのですが、皐月さんは犯人を追いかけてしまったのです」

「成程、だから戻ってきた時に後が付いたと」

納得の声を上げたのは警部。他の人間も表情からも疑問の色は消えつつある。

「そうです。因みに窓ガラスの件は資料を見たところ、つい最近、しかも円条寺辰巳の独断で行ったとされています」

「ふむ、しかし外部犯ならば防犯ガラスの特性くらい知っているだろう？」

「そこです。そこがおかしいと私が感じた点です。プロなら当然見分ける事が出来る。にも関わらず防犯ガラスを選んできました。つまり犯人は素人ではあるが、自分の持つ情報に自信があった……と言う仮定ができるのです」

しばしの沈黙の後、全員から戸惑いの声上がる。

竜胆の言っている事の意味を全員が理解したからだ。竜胆はこう言っている。

犯人は、外部犯に見せかけた内部犯である……と。

「なっ、それはどういう事だね！」

「どういうも何も、そう言う事ですよ……訓行さん」

明らかな動揺を見せる訓行に竜胆は冷静に告げる。

緊張が高まる中、竜胆は決定的な言葉を口にする。

「内部犯であるならば、この犯行を実行できる人間は限られるんですよ」

一瞬、考える時間を与えた後で、竜胆は大きく息を吸いこんだ。

「犯人は、そう……あなたです」

手紙、姉妹の絆（後書き）

宣言通り（？）一日遅れてしまった、兄疏です……。

今回でようやく推理物の定番のセリフ言えました！

と、言う訳で次回は犯人が誰だと言う所から始まります。まあ、もう答え出てるようなもんですが楽しんでいただければ幸いです。

では、次回の更新は……今夜です。7月1日0時更新予定です。予定、と言うよりも今から作業するので確定ですけれど……。

後二話程ですが、よろしくお願いします。

家族の絆

「犯人は、そう……あなたです」

竜胆の指がゆっくりと上がり、周囲の人間にとっては気の遠くなる様な時間が経ってから一人の人間を指差した。

各自それぞれの、息をのむ音が静かな部屋に響き渡る。

竜胆と皐月のみが、冷静に皆を見渡していた。だが、静寂を破る様に一人の男が怒声を上げる。

「なっ、何故私なんだ！ それに、それでは私が父を殺したと言っている様なものじゃないか！」

竜胆を睨みつけた後、皆に同意を求める様に周囲を見渡す。

「私は、そう言っているんですよ、円条寺訓行さん。あなたが殺人のあった晩、自分の父親を包丁で刺し殺したと言っているんです」

紅井や警部は驚いたような表情を見せるが言葉は発しない。竜胆があまりに自信を持って言い放ったからだ。

「はっ、探偵が聞いてあきれるっ！ 父は青酸カリで殺されたんだろう、そんな基本的な事を忘れているようではお前の推理も信憑性はないなっ！」

紅井や警部達の驚いた表情にも気付かず、訓行は声を荒げる。

「大体お前の推理は推測だらけではないか、そんなあやふやなもので騙そうなんて甘かったな」

勝ち誇る様に腰に手を当てた訓行は周囲の空気の変化にようやく気が付いたようだ。

「訓行さん、ありがとうございます……今の言葉で私の推測は、確信へと変わりました」

「はっ……？」

「和美さん、私は死因を説明した時、何と言いましたか？」

和美は突然会話を振られた事に驚き、青ざめていた顔を更に青ざめる。そして震える唇から、やはり震えた声を紡ぎ出した。

「ど……毒殺、としか……」

紅井や警部以外の人間、日和や皐月達からも驚愕の声が上がり、和美を除いた皆の視線が訓行へと一気に集まる。

訓行の表情は更に歪み、いや、だがかし……と意味の無い言葉を呟いていた。

「いやっ、だが……青酸カリなんてどこで」

「訓行さん、確かあなた……言っていましたよね『昆虫採集が趣味』、だと」

「ぐっ……」

青酸カリには、バッタなどの昆虫標本を作る際に使う事で、標本の色が抜けにくくなる性質がある。

訓行は竜胆の指摘に黙り込んでしまった。

「経緯はこうです」

訓行は侵入者があった夜、外に和美と出かけていた。

そして帰って来る前に屋敷へと侵入し辰巳殺害を目論む。和美と一緒に居た事がアリバイとなる予定だったのだろう。家の人間だから警備の事も侵入経路も容易に解決できます。

しかし、辰巳が防犯ガラスにしていた事は知らなかった。家の人間とはいえ泥棒に関しては素人、視野が狭くなっていたのでしょう。そのまま侵入を試みたのです。

だがそこで皐月と会ってしまふ。顔を見られたかどうかは知りませんが、訓行は逃げ出し、何事もなかったかのように和美と家に帰ったのです。

「ここまででは、よろしいですね？」

一同は無言の肯定を示していた。

「次に殺人が起こった晩の話です」

紅井から水を受け取り、竜胆は一息つく。

侵入した晩に見た皐月から、訓行はある事を思い出した。

皐月が毎晩辰巳にお茶を運んでいると言う事です。そこで訓行は皐月を犯人に仕立て上げる事を考えたのでしょう。

準備しておいたお茶に青酸カリを仕込ませ、後は待ちました。

「だがそこで想定外の事件が起こった」

「ええ、予想に反して……お茶を持っていたのは日和ちゃんだったのです。だから訓行さんは強調した。普段行っていたのは皐月である、日和ちゃんは動機がないからするはずもない、とね。自分から目を外させる為に」

「……っ」

訓行はギリッと強く唇を噛んでいた。先程までの怒りの形相は薄れ、今では戸惑い、恐れといった感情がありありと見て取れた。

「だが竜胆、円条寺訓行が犯人だったとして、動機はあるのか？」

「……ここからは完全に推測になるのですが、恐らく侵入者のあった晩、日和ちゃんは円条寺辰巳から何か重要な話、もしくは重要な物を受け取っていると思われます。そこで話された事が殺人を強行する理由の一つになったのでしょう」

竜胆は皆に気づかれないよう、皐月の顔を覗き見る。

そこには驚きと、少しの喜びを浮かべている表情があった。

「日和ちゃん、侵入者のあった晩……円条寺辰巳、君の祖父から何か受け取ってはいないかい？」

今度は日和へと皆の視線が集中する。

日和は、震えながら一つの封筒を取り出した。だがその震えは恐れからではなく、喜びの震えだったように竜胆は感じていた。

「ありがとう……これは」

そこには、達筆過ぎるほどの流れる様な字で【遺書】と書かれて

いた。

「四つの事が書かれていますね……自分が恐らくもうすぐ死ぬ事について。次に円条寺皐月は養子ではなく、自分の本当の娘である。警備会社の経営権について。最後に、財産は……円条寺皐月、円条寺日和の両名に残す、事……」

竜胆は何度か詰まりそうになりながら、なんとか遺書の概要を読みあげる。円条寺家の面々、特に皐月は目を大きく広げ、息を止めていた。

「訓行さん、あなた……この事について、薄々気づいていたのではないですか？」

いち早く復活した訓行は竜胆の持つ遺書を奪い取り、食い入る様に読み始めた。既に竜胆の言葉は耳に入っていないようだ。

「な、なんだ……これはっ！ 私、私の事について何も書かれてっ！ ……ん？」

横から覗きこんでいた和美がゆっくりと、訓行が目を止めた文章を読み上げる。

「円条寺訓行に関しては、円条寺警備の利益を横領し……会社の利益に著しく反した為、懲戒処分……並びに円条寺家からの除名を命ず……る」

警部が訓行の肩を掴んだと同時に……訓行は地面へと、崩れ込んだ。

家族の絆（後書き）

皐月は辰巳が本当の家族だったと分かってどう思っているんだろうなあ、と思いながら……こんばんわ兄琉です。

今回で事件自体は終了、という訳なのですが後一話エピローグがあります。

だがこのエピローグが一話分、3, 500字程ある……。分けるべきか否か。

多分、分けずに垂れ流しますが後一話お付き合いください。

ではでは、次回は7月1日22時更新です。
またお会いしましょう！。

あたしの在り処（前書き）

エピソード的なお話です。

あたしの在り処

円条寺家に別れを告げてから二日後、竜胆と紅井はとある霊園へと足を運んでいた。

竜胆は何かから隠れるように木の陰に身を潜め、時計を確認する。

「十五時、か……そろそろ大丈夫だな」

どうやら本当に身を隠していたらしい。紅井は竜胆の後ろで微笑んでいた。

周囲に目を向け、安全を確認した竜胆はようやく日の下へと姿を現す。

木の陰から三十メートルばかり離れた場所にあった墓石の前で二人は足を止めた。

「初めて、ですね……ここに来るのは」

ここにきて初めて紅井が口を開く。それに対して竜胆は紅井の方を見ずに、言葉を返した。

「ああ、そうだったか？ ま、俺もたまには、な」

竜胆は【竜胆涼音之墓】と書かれた小さな墓標の前で膝を折った。紅井もそれに追随するように膝をつく。

「なあ、家族がバラバラになっていくって、どんな感じなんだろう

な」

「それは、竜胆さんが一番分かっているんじゃないですか？」

竜胆は思わず自分の口から出た言葉を取り消そうとしたが、既に紅井からの言葉が返ってきた後だった。

「俺は、家族の事なんか、忘れちゃったよ……昔過ぎてな」

そういった竜胆の手には、綺麗に包装された小さな箱が、大事に抱えられている。

箱にはカードが付いていて、そこには少し傾いた竜胆の字でこう書かれていた。

【ハッピーバースデー、涼音】

「竜胆さんも、嘘つきですね」

紅井は思わず笑みをこぼすのだった。

霊園から事務所へと帰ってきた竜胆と紅井は普段通りに過ごしていた。

厳密には二人の纏う空気は幾らかそわそわと、何かを期待する様な物だったが。

「おい、紅井……まだか」

「竜胆さん、急いては事をし損じる、ですよ」

そう言う紅井自身も椅子から腰が一センチ程離れていたので全くと言って説得力はなかったが。

竜胆自身もチラチラと事務所の入り口の方を確認して、落ちつかないようだ。

カッン、カッン……

「!」

二人は何かの足音に、突然背中に冷たいものでも落ちてきたかのように反応し、飛び上がった。

紅井は懐へと手を差し込み、何かを取り出す準備を固める。

「……来る」

いつになく真剣な竜胆の表情に呼応するように、事務所内の空気は妙な緊張をはらんでいる。

竜胆の期待に応える様に扉から内側に向けて、軽い金属の音が数度響いた。

「……っ! いらっしやああ……ん?」

堪え切れずに扉を開けながら喜びをあらわにした竜胆はそこにあった姿に疑問符を浮かべた。

「竜胆さんどうしました？」

「なんでお前達が……」

紅井は竜胆に隠れて扉の外が見えないようにでこちらも疑問を浮かべる。

二人にとっては想定外の人物が外に居たようだ。

「何って、あたし達がここに居たらダメなの？」

「え、ええつと……こんなにち、わ」

竜胆の眼前にいたのは皐月と日和の、二人だった。

予想外すぎる答えに狼狽する竜胆を尻目に皐月はさも当然という様に、日和は竜胆を上目遣いで見上げながらおどおどと、事務所へと入って来る。

「お、おいっ……！」

竜胆は慌てて二人を追いつくとするが、二人の後に居た人物を見て、訝しむ顔から喜びへと百八十度表情を変えた。

そこに居たのは丸く大きな木の桶を持った、白い作業着を着た人物。

「ちわあ、いつもお世話になってます。特上寿司二つ、お持ちしました」

「おお！ お待ちしました！」

竜胆は紅井から受け取った財布から、著名人の描かれた札を数枚取り出し渡した。

竜胆と紅井は喜び勇んでテーブルへと寿司を運ぶ。だが、二人は

忘れていた……今この事務所には自分以外の人間がいる、と言う事に。

「あ、美味しそうなお寿司ね。いただきっ」

「おまつ！ 俺達の金だぞっ！」

竜胆はいとも簡単に口へと吸い込まれていくトロに悲痛な声を上げる。

だがそうしている間にも皐月の口へと吸い込まれていく宝石達。

「んぐっ、何よ。元はと言えばあたし達のお金でしょ？ ほら日和、遠慮せずに食べなよ」

「え、は……はい、いただきます」

「なっ、日和ちゃんまで！」

大人しい日和まで寿司を口に運び始める。しかも遠慮は一切なく、大トロがその小さな唇に飛び込んでいった。

「くそお！ こうなったらやられる前にっ！」

「あ、アンタ落ちついて食べなさいよ！」

「お前に言われたくないわっ！」

竜胆と皐月の鬼気迫る食べっぷりに日和はすっかり怯え、紅井へと目移した。

紅井はゆっくりと首を振り、ため息をつく。

「やっぱり、こうなるんですね……」

それから暫く、四人による寿司争奪戦が繰り広げられたのだった。

寿司も終盤に差し掛かり、落ちつき始めた頃。久しぶりに竜胆が会話らしい会話を始めた。

「んぐっ……そう言えば、皐月からの依頼終えてなかったな」

頬一杯に寿司を詰め込んだ皐月は首を傾げ、止まった。竜胆はその顔を見てハムスターみたいだなと思いつつ苦笑を浮かべる。

「嘘つき、だよ。嘘つきを探すってのが依頼だっただろう？」

「あ、ああ……それはもう、いいの」

今度は皐月が苦笑する番だった。

「いや、依頼は最後までするのが信条だからな。聞いてもらうぞ」

日和は疑問を浮かべていたが、その手にはしっかりと寿司が掴まれている。

「俺は最初皐月が嘘つきだと思っていた。それだけが頭にあったんだ。だがそれは間違いで、嘘つきは一人じゃなかった。なんせ依頼主が嘘つき……だからな」

皐月は、今度は照れる様に顔を逸らす。竜胆は安心したように話を続けた。

「嘘つきには二種類の人間がいる事に俺は気がついたんだ。一つは真っ赤な嘘をつく嘘つき、これは皐月の事だ。発信者自身が嘘をつ

こうと思い、相手に騙そうとする。これが一般的に言われる嘘だな」

自分が居ないという歪んだ居場所を何とか繋ぎ止める為に、自己を確立する為に始めた嘘が、気が付けば自分を構成する一部になってしまったんだろうな、と竜胆は心の中で付け加えていた。

竜胆は椅子から立ち上がり、少し距離を取る。

「次に、無意識に相手を騙す、勘違いさせてしまう嘘つきだ。これは発信者が嘘をつこうと思ひ嘘をつくのではなく、発信者の発言を受信者が誤解してしまい、結果として嘘になってしまうものだ。この嘘つきが、いたんだよ。つまり嘘つきは二人……そのもう一人とは」

竜胆は茶番であるかのように大袈裟に、体を大きく動かしながら人差し指を動かしていた。

「あなたですよ、円条寺日和さん」

竜胆に指差された日和は、驚く以前に何故か後ろを振り向いた。

「いや、後ろにはだれもいないからね」

冷静に竜胆は突っ込みを入れた。ゆっくりと首をかしげながら、日和は自分の顔に指を向ける。

「まあ、信じられないのも無理はない。日和ちゃん自身は嘘をついている自覚は無いのだから。日和ちゃんが自分から発言しなかった事が誤解を増長させていたんだろう。皐月もその事を知っていて、日和ちゃんの前では平然と嘘をつく事が出来たんだ」

竜胆は再び皐月の方へと向き直った。

「では、依頼『嘘つきを見付け出して欲しい』の調査結果を発表しよう」

一度天井に顔を向け、降ろす勢いそのままに指を振り降ろした。

「嘘つきは二人、円条寺皐月と円条寺日和だ！」

不敵な笑みを浮かべた竜胆の視線の先には、柔らかい笑みを浮かべ涙を溜めている皐月の姿があった。

「竜胆さん、嘘つき……見つけてくれたね……ありがとう」

竜胆はこの笑みを忘れる事はないだろうと、心の深い部分で感じていた。

寿司を食べ終わり、紅井の出した茶で一息入っていたところ。

ふと思い出したように竜胆は切り出した。

「ところで二人とも、何でここに来たんだ？」

そのセリフを口に出した途端、階段の下の方から数人の足音が聞こえてくる。

竜胆は嫌な汗が頬を伝うのを感じた。

「あ、そういえば言ってなかったっけ」

「や……やっぱ止めっ」

「あたし達今日からこの上に住む事になったから」

「……………嘘、だよな」

「もう、あたしが嘘をつく必要はないでしょ？ 誰かのお陰でね」

皐月のこの上ない笑みに竜胆は一步、二歩と後ずさり、手で顔を覆った。

「嘘、だろおおおおおおお！」

竜胆の、本日二度目の悲痛な叫びが竜胆探偵事務所に響き渡ったのだった。

『【私立竜胆探偵事務所】

探し物から事件調査までなんでもござれ！

竜胆が誠心誠意をもって解決いたします！』

商店街の裏路地に、このような看板がある。

金遣いが荒く、電話を引くことすらできない探偵事務所。

でも確かにそれは存在している……。

これからは、少し賑やかになりそうだった。

あたしの在り処（後書き）

と、言う事で完結いたしました『アタシの在り処【竜胆探偵事務所事件簿】』いかがだったでしょうか。

推理なんて普段読まないジャンルに挑戦してみたは良いモノの勝手がわからず右往左往、そんな中生まれた作品でした。

そんな私なので、普段推理小説を読まない方でも気軽に読める事を目標に書き、その目標はそれなりに達成できたのではないかと思います。

事件の内容や解決法等はやはり未熟の一言に尽きますが、また推理物を書く機会があれば一步步上達していければいいと言ったところですよ。

皐月達の今後や竜胆達の過去、色々なドラマが【竜胆探偵事務所】には詰まっています。そちらも機会があれば書いていければいいなあ……。

では続きは活動報告で……キャラ設定等を書きながらこの作品を締めさせていただきます。

次書くのはまた小嘶かなあ……と思いつつ、ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

もしよろしければ評価感想をお願いしますm（　　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0303m/>

アタシの在り処【竜胆探偵事務所事件簿】

2011年1月25日07時37分発行